

遺蹟遺物の記載に完成した技術を發揮してゐるのは本叢書の常に高く評價される所以であるが、本書において著者は更に遺蹟遺物を通じて生活を考へ、文化を人生に即して眺めようとする意圖を強く示してゐる。さうしてそれが本書において成功してゐるが故に、かへつてわれ／＼は學問としての考古學の局限の問題を想起せずには居られないのである。考古學として更に進んでこの境地を超えることは不可能であらうか。

尙本書には附録として、三宅宗悅・吉見恒雄・難波光重諸氏の「赤峰紅山後石礪墓人骨の人類學的研究」、直良信夫氏の「赤峰紅山後出土鳥獸骨」、磯松嶺造氏の「赤峰紅山後先史土器の技術的觀察」の三篇が添へられてゐる。多數の原色版を使用して豪華な装ひをこらした本書を見るにつけ、健康を害して病室に移られた後にも親しく朱筆をとつて、四校五校と校正のことにまで心を盡くされた著者の一人たる濱田先生が、つひにその完成を一步前にして世を去られ、この書を悲しい記念として遺されたことを思うては洵に哀惜の情に堪へぬ次第である。四六四倍版、本文一三一頁、英文概要一三頁、圖版四七葉、東亞考古學會發行、定價二〇・〇〇（小林行雄）

彌生式土器聚成圖錄正編

森本六爾・小林行雄編

「一粒の粃、若し地にこぼれ落ちたならば、遂にたゞ一粒の粃に終らないであらう」と嘗て編者の一人たる森本氏は彌生式土器の

面に印された一粒の粃を見て叫んだが、今日日本石器時代文化の性格、就中彌生式文化に於ける生業問題の進展は、全く此の一粒の粃痕の觀察から發したと言つてよいのである。東京考古學會の創設者たる森本六爾氏は彌生式文化の本質を把握することを一の中心對象としたのである。而して氏はその基礎的工作の協力者として豫て同土器の形態の實測に専念してゐた小林行雄氏を得たのであつた。不幸にも森本氏は其の業の途中で他界したが、小林氏はその後京都帝大考古學教室に勤務する傍、よくこれを繼承して同人藤澤一夫氏、藤森榮一氏等の援助を受けて當初の意企を完成、さしたのが本書である。而して故濱田博士が本書の出版に對して援助をあたへられ、其の努力にふさはしい外容を以て世に出た所は編者の満足とする所であらう。前後數年に互る小林氏等の熱心に依つて出来上つた本書は次いで世に出る解説篇と併せて主として氏の彌生式土器に關する見解を發表せるものとして、これが單なる聚成圖錄であり乍ら特殊の意味をもつものである。先づ集むる所の日本内地の彌生式土器一二九六箇をば氏は北九州・南九州・東九州・西部瀬戸内地方・山陰地方・中部瀬戸内地方・畿内地方・琵琶湖地方・伊勢灣地方・中部高地地方・駿河灣地方・南關東地方の十二地域に區分して聚成してゐる。更にこの材料たる土器に就いては發掘者實測者並びに參考文獻を各々別々に登錄した目錄を附してゐる。器の一々の實測が一面技術家として優れてゐる小林氏の手になる事よりして單なる一破片からも全體を推定し得るまでに製圖されてゐる點は喜ばしく更に本書には主要遺

跡の一覽圖が九州・中國・近畿・中部・關東に三分せられて收められてあり、無味乾燥な遺跡地名を地圖の上で一見し得ることも周到な用意として賞すべきである。たゞこれは欲を云ふと縮尺が大きすぎた爲に地理學的な解釋を更に遺跡地に施さうとする者にとつては充分でない憾がある。次ぎに本書は費用の關係からでもあらうが、あくまで土器の聚成圖であつて遺跡の聚成圖でないことも見方によつては物足りなさを感じしむるものがある。即ち此の限りに於いて他の伴出遺物に就いては讀者は改めて文獻その他を見かへさねばならないからである。元來聚成圖は故濱田博士が渡歐中ベトリイ教授の幾多の業績に刺戟されて、日本に於いてもこれが必要を痛感し、歸朝後既に京都大學の研究報告書にて實例を示された所のものである。同研究報告第三冊に收録の梅原助教の彌生式土器圖録を始め、以後發表の數々の聚成圖がそれで研究者に便宜をあたへ來た事はいふ迄もない。東京考古學會の同人が更に發展せしめ時代に應じたこの聚成圖を作られたことは學界の等しく感謝する所であらう。なほこの土器の聚成圖を主として鉢、壺、甕或は高杯、小形大形土器等の形に分類せられてゐて、從來同人諸氏が近畿その他の土器から組立てた編年即ち遠賀川式櫛目式、穗積式の名稱概念の下に作成してない事も注意せらるべきであらう。私等はむしろ複雑の中より大きな單純がこの聚成の中から生れ出づることを思ふ者として、上記の從來の編年をしりぞけて形態に先づ依つた態度を多とせねばならない。終りにこの圖録を見てみると彌生式土器にも縄紋土器と同様に否をそれ以上に

共通なものに統一され乍らも個性性を地域に於いて夫々有してゐる事實を知るのである。森本氏が言つた低地の遺跡換言せば定着の文化が有する様々な様相をこの圖録に於いて模様、器形の上に於いてさへ發見して、私は現在學界の彌生式文化の研究がなほ一層歴史的な立場で考察されねばならない事を深く感ずるのである。それらが解説編にて如何に編著者により取扱はれるか、吾人はそれを期待するものである。(東京考古學會發行、定價續篇共一五・〇〇)(藤岡謙二郎)

天 平 地 寶

帝室博物館編

奈良時代の研究は主として文獻に俟たねばならないが、個別的事象乃至地方の情況を知悉する上では、當代の出土品は甚だ重要な位置を占めてをり、文獻の缺を補ふことは僅少ではないのである。この意味で帝室博物館が昭和十一年四月、奈良時代出土品展覽會を開催して、多數の資料を集められたことは、當該文化の認識を深め、研究の上に一の刷新を齎した點に時宜に適した企てであつた。然も今回石田茂作氏の盡力により、以上の出土品を中心とし、更に當時都合で陳列し得なかつた逸品を加へた豪華な圖録が見事完成され、一は不幸にして同展覽會を觀る機會を失した人々の觀覽に供へ、一は史料、美術的に價値高い出土品を一括して記録せられた事は實に學界の美譽と謂はねばならない。

本書は菊倍版全百十六葉のコロタイプ圖版を中心とするもので